

Ⅲ 高熊2号墳測量調査報告

本文目次

一 位置と環境	1
二 調査経過	3
三 調査成果	5
1. 墳丘の現状	5
2. 遺物	7
四 まとめ	8

挿図目次

第1図 植木町の位置	1
第2図 周辺の古墳分布図	2
第3図 高熊2号墳の位置	3
第4図 高熊2号墳測量調査風景	3
第5図 伝マロ塚古墳出土遺物調査風景	3
第6図 高熊2号墳墳丘測量図	6
第7図 採集須恵器実測図	7
第8図 採集須恵器	7
第9図 土器(左:外面, 右:内面)	7

図版目次

図版 1	1 高熊2号墳遠景(北西から)
	2 高熊2号墳の現状(南西から)
図版 2	1 頂部平坦面の倒木とともに掘り起こされた土塊にみられる土層(西から)
	2 伝マロ塚古墳出土甲冑(国立歴史民俗博物館所蔵)

例 言

- 本編は熊本大学文学部考古学研究室による熊本県鹿本郡植木町古閑穴田平所在高熊2号墳の測量調査報告である。なお、今回の調査を高熊2号墳第1次調査と呼称する。
- 調査は研究室が起案し、植木町教育委員会の協力を得て実施された。
- 調査期間は2002年9月1日から9月11日までの11日間である。
- 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、墳丘測量図の方位は磁北を示す。測量基準点の国土座標については未測量のため示していない。報告書抄録に示した北緯と東経は世界測地系によるものである。ただし、その数値は国土地理院ホームページの地形図閲覧システムによるもので、基準点測量によって得たものではない。
- 第2図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである(承認番号 平14九複, 第371号)。
- 調査期間中、以下の方々が現場を来訪され、種々のご教示を下さった。
伊藤奎二、坂井義哉(大牟田市教育委員会)、竹田宏司(玉名市教育委員会)、中原幹彦(植木町教育委員会)、山口健剛(山鹿市教育委員会)(50音順, 敬称略)
- 調査参加者は以下の通りである。
杉井健(教官)、新里亮人(大学院博士課程1年生)、木村龍生・竹中克繁(以上大学院修士課程2年生)、荒木隆宏・檀佳克(以上大学院修士課程1年生)、西嶋剛広(学部4年生)、仲矢咲紀(学部3年生)、沖謙介・齋藤伸太郎・三宮慶太・高橋直人・麓晃・前田真由子・山下典子(以上学部2年生)
- 写真撮影については、現場写真を杉井・檀・西嶋が、遺物写真を望月大輔(学部3年生)が担当した。伝マロ塚古墳出土甲冑については杉井が撮影したが、その撮影と掲載には国立歴史民俗博物館長の許可を得た(歴博資第301-2号)。遺物の実測は木村による。
- 本編の編集は杉井・檀が行い、執筆分担については執筆者名を各文末に示した。

一 位置と環境

地理的環境 熊本県を代表する河川の1つに菊池川がある。菊池川は熊本県北部の阿蘇外輪山を源とし、途中7つの支流が集まる一級河川である。上流域では溪谷を形成するが、中流域においては、山地あるいは台地に四方を囲まれた広大な盆地平野を流れる。そしてふたたび山間部を縫うようにして下流域の玉名平野に達し、有明海に注ぐ。

菊池川流域

高熊2号墳は、菊池川中流域でそれに合流する合志川左岸の河岸段丘上、標高約57mに所在する。この一帯は、菊池川中流域に形成される盆地平野南側の台地北縁にあたる。この台地には小河川によって多くの谷地形が形成されているため、いくつもの舌状台地が突き出したような地形を呈している。高熊2号墳は、合志川に合流する2つの小河川、夏目川と小野川の開析によって形成された舌状台地の先端部に位置する。ここは北に広がる盆地平野を一望のもとに見下ろすことができる眺望の地である。

高熊2号墳の位置

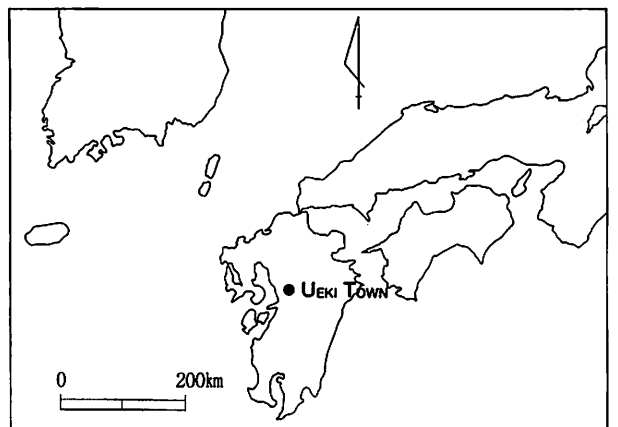
歴史的環境 (第2図) 熊本県地域の前方後円墳は、熊本市域をはさんでその南北両地域に分布する。そのうち南側の宇土半島基部地域において、前方後円墳の築造が開始された。それは古墳時代前期前葉のことで、船載三角縁四神四獣鏡を出土した城ノ越古墳(前方後円墳, 43m)が最初の前方後円墳とみなされている。前期中葉には、未盗掘の舟形石棺のなかから、豊富な副葬品とともに完全なかたちの女性人骨が出土した向野田古墳(前方後円墳, 90m)が築造される。そして、前期後葉の天神山古墳(前方後円墳, 106m)を最後に、宇土半島基部地域では前方後円墳の築造がいったん停止する。

古墳時代前期

前期後葉になってさかんに前方後円墳の築造が行われるのは、熊本県北部の菊池川下流域である。当地域における最初の前方後円墳は山下古墳(前方後円墳, 59m)と考えられており、それは舟形石棺を直葬することを特徴とする。続いて、菊池川下流域の右岸では院塚古墳(前方後円墳, 78m)や藤光寺古墳(前方後円墳, 85m)が、左岸南部では天水立花大塚古墳(前方後円墳, 90m前後)といった前方後円墳が築造される。これらのあと、前方後円墳の築造地域は菊池川中流域に移動する。この時期の代表的な古墳に岩原双子塚古墳がある。当古墳は岩原台地上に形成された古墳群の主墳で、墳長102mを誇り、県下最大級の前方後円墳である。そのほか、銭亀塚古墳(前方後円墳, 65m)や、革綴短甲片が出土した慈恩寺経塚古墳(円墳, 53m)など、中期前葉には菊池川中流域において多くの古墳が築造された。

前期後葉から中期

中期中葉から後葉になると、熊本県地域全体において前方後円墳の築造が低調になる。しかし、そうした時期にあって、菊池川中流域の植木町周辺地域には高熊古墳が築造されているのである。高熊古墳は、推定復元長が約72mの前方後円墳である。内部主体は不明であるが、採集された円筒埴輪には熊本県地域では珍しく、ていねいなB種ヨコハケが施されている。直弧文を描いた家形埴輪片なども検出されている。前方後円墳の築造が低調な時期に、しかも熊本県北部と南部を結ぶ交通の要衝に築造されているという点で、高熊古墳は熊本県地域にお



第1図 植木町の位置

高熊2号墳 ける古墳時代中期の政治構造を考える上で非常に重要な位置を占めている。高熊2号墳は、高熊古墳の西約200m という近接した場所に位置しているため、これに続く古墳である可能性がある。また、当古墳は、眉庇付冑や衝角付冑、横柄板鋌留短甲などの豊富な鉄製武具が出土したマロ塚古墳ともみなされているが、その当否は確定していない。なお、高熊2号墳の周辺は、上述した慈恩寺経塚古墳や、三角板鋌留短甲片と、眉庇付冑の痕跡が検出された上生上ノ原4号石棺の存在が示すように、熊本県地域において鉄製甲冑が集積する地域の1つである。

後期 後期になると前方後円墳の築造地域は菊池川下流域に移動し、稲荷山古墳（前方後円墳，110m）や江田船山古墳（前方後円墳，62m）などが築かれる。その後すぐに前方後円墳の築造は熊本県地域全体に広がるが、そうした状況のなかで菊池川下流域では相対的にその築造が低調になる。この時期、もっともさかんに前方後円墳が築造されるのは氷川下流域の野津古墳群で、垂飾付耳飾や陶質土器が出土した物見櫓古墳（前方後円墳，60m）や墳長100mを超える中ノ城古墳（前方後円墳，102m）などの数基が短期間に集中して築かれている。ほかに、宇土半島基部地域では国越古墳（前方後円墳，62m）が、菊池川中流域では著名な装飾古墳であるチブサン古墳（前方後円墳，44m）や横山古墳（前方後円墳，39m）、あるいは石人が出土した木柑子フタツカサン古墳（前方後円墳，65m）や木柑子高塚古墳（前方後円墳，規模不明）などが築造される。そして、これらを最後に熊本県地域における前方後円墳の築造は停止する。

終末期 終末期には、各地域に多くの円墳が築かれているが、熊本県唯一の方墳である椿原古墳（方墳，19m）が宇土半島基部地域に築造されている点は注目される。（西嶋）

参考文献

高木恭二・藏富士寛「肥後における古墳文化の特質－筑後八女古墳群との比較－」【八女古墳群の再検討－周辺地域で、なにがおこったか－】第1回九州前方後円墳研究会大会発表要旨・見学会資料 九州前方後円墳研究会、1998年。

宮崎敬士「肥後における前方後円墳の動向」【九州における古墳時代首長墓の動向】発表要旨資料 九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会、1995年。



第2図 周辺の古墳分布図



第3図 高熊2号墳の位置

二 調査経過

調査に至る経緯と目的 高熊2号墳は熊本県鹿本郡植木町古閑穴田平に所在する。高熊古墳（前方後円墳，中期）の西方約200m、北西側に傾斜する丘陵斜面に位置している（第3図）。当地に円丘状の高まりが存在することへの言及は、すでに1964年発行の『玉名高校考古学部部報』第7号⁽¹⁾にみられるが、現在まで測量図が作成されたこともなく、その実態は不明のままであった。

一方、当地付近の古墳から、眉庇付冑や衝角付冑、横矧板鋌留短甲、さらに鉄鏃や鉄刀などが出土したと伝えられていた。それら出土遺物は国指定重要文化財として国立歴史民俗博物館に所蔵されているが、肝心の出土古墳の正確な所在地は確定されていない。出土古墳名はマロ塚古墳とされたが、それは、それら遺物の出土候補地とされた高熊2号墳がマツヅカ、マルヅカ、マロツカなどと呼ばれていたことによる。しかし、高熊2号墳が、甲冑などを出土したマロ塚古墳であるとする確証はまったく得られていない。

さて、熊本大学文学部考古学研究室では、熊本県地域における古墳動向の総合的研究をテーマとしたプロジェクト研究を企画した。植木町周辺地域を第1のフィールドに選んだが、それは、当該地域が菊池川流域を中心とする熊本県北部地域でも南側に位置しており、熊本市域以南と熊本県北部地域をつなぐ重要な地点であること、したがって当該地域は熊本県地域全体の古墳動向を考察するうえで欠くことができない場所であること、しかし当該地域の古墳の内容

高熊2号墳

マロ塚古墳

熊本県地域における古墳動向の総合的研究



第4図 高熊2号墳測量調査風景



第5図 伝マロ塚古墳出土遺物調査風景

には不明な点が多いことなどが理由である。当研究は2002年3月の高熊古墳測量調査によって開始されたが、今回報告する高熊2号墳測量調査はそれに次いで実施された調査に当たる。

調査の目的

高熊2号墳測量調査は、熊本大学文学部考古学研究室が主体となり、当地が古墳であるのかどうか、古墳であるとすればその墳形は何かなどの解明を目的として実施された。調査担当者は熊本大学文学部助教授杉井健と同文学研究科大学院生檀佳克、調査期間は2002年9月1日から11日までの11日間である。測量調査に引き続いて、国立歴史民俗博物館に所蔵されている伝マロ塚古墳出土遺物の実態把握に向けた調査にも着手したが、これを含めた今回の調査には、熊本大学教育改善推進費と同地域貢献特別支援事業費を使用した。また、科学研究費補助金（基盤研究C2，研究代表者杉井健）の一部も使用している。

なお、高熊2号墳にかんする今回の測量調査を、高熊2号墳第1次調査と呼称する。

測量調査の経過

調査の経過 測量調査は、植木町古閑公民館を宿舎とし、古墳周辺の下草伐採から開始した。それに並行して四等三角点下原（標高53.02m）を基準とした水準測量を行い、古墳近くに設置した基準点の高さを求めた。測量基準点は、墳丘状の高まりを中心として直交方向に設置したほか、それら基準点のいくつかを含む閉合トラバース網を周囲に設け、古墳周辺地形の測量に備えた。そして補助的な基準点を適宜設置しながら、平板測量によって、縮尺100分の1、25cm間隔の等高線を描いた。また、墳丘状の高まりの北側には倒木が存在したが、その根とともに掘り起こされた土塊を精査することによってその地点の土層堆積状況を確認した（図版2-1）。その際、表土と地山の境界付近から土器片1点（第9図）を検出した。古墳時代の遺物としては、2001年3月19日の現地視察の際、墳丘状の高まりから北西側に下った標高47m付近の平坦地で採集した須恵器坏身片（第7・8図）がある。なお、今後の調査に備えて、頂部平坦面の2箇所恒久的な測量基準杭（C1・C2）を設置した。

伝マロ塚古墳出土遺物調査の経過

伝マロ塚古墳出土遺物の調査は、2002年11月29・30日に国立歴史民俗博物館にて行った。植木町教育委員会生涯学習課中原幹彦、熊本古墳研究会会長高木恭二（宇土市教育委員会）、鹿児島大学総合研究博物館橋本達也の3氏にもご同行いただき、種々のアドバイスを得ながら調査を実施したが、これまでにほとんど公表されたことのない資料であるため、おもにその現状の把握に努めた。また、同博物館の杉山晋作、白石太一郎の両氏と、今後の整理作業の進め方および報告書の作成方法について協議した。

謝辞

謝辞 植木町文化財保護委員の高木博敏氏は、プロジェクト研究の計画時点からさまざまなアドバイスを与えられたほか、今回の測量調査では地権者との連絡調整の任に当たられた。地元古閑地区区長の平田房穂氏および地区住民の方々は公民館の使用を許可され、合宿生活の実施にかんして便宜を図られた。古墳および周辺地の地権者の上田國泰、春田幸信、春田生士、平田房穂、村上成也、吉田利之の各氏は、地内への立ち入りを許可された。伝マロ塚古墳出土遺物の調査において、国立歴史民俗博物館の杉山晋作および白石太一郎の両氏はさまざまな便宜を図られたほか、今後の継続的な調査の実施に対して種々の助言をされ、またその許可を与えられた。植木町教育委員会および生涯学習課中原幹彦氏は、調査進行の円滑化にかんして多大な便宜を図られた。以上のほかにもさまざまな方面からの協力と援助によって調査を実施できたことに、深く感謝の意を表したい。（杉井）

註（1）田辺哲夫「高熊古墳調査報告（その1）」『玉名高校考古学部部報』第7号 熊本県立玉名高等学校考古学部、1964年。

三 調査成果

1. 墳丘の現状（第6図）

菊池川の支流合志川が西から北へその流れを変える箇所の左岸には、南西側から北東側へ張り出した舌状の丘陵が存在する。高熊2号墳は、その丘陵先端部の北西斜面に位置している（第3図）。墳丘状の高まりの最高点の標高は57.151mであり、丘陵頂部にある高熊古墳周辺の標高が69～70mであるから、その比高差は十数mをはかる。眼下に広がる水田面との比高差はおよそ18mである。現在、高熊2号墳とその周辺はうっそうとした竹藪で覆われている。

立地

高熊2号墳とされる墳丘状の高まりは、その頂部に直径10m程度の平坦面を有している。斜面の傾斜は、頂部平坦面の北西側から南東側では標高56.75m付近から、また南西側では標高56.25m付近から始まっている。そして、標高55m付近にはふたたび平坦面が形成されるが、注目されるのは、この平坦面がさらに南西側へとのびている点である。また、大きく削平されているため判断は難しいが、南東側にもこの平坦面が継続していた可能性がある。こうした点を重視すれば、標高55m付近が平坦に削られることによって、墳丘状の高まりが形成されたとみなすことも可能である。したがって、この高まりが古墳であるとするならば、その墳丘裾は標高55m付近にあったと推測することができるだろう。その場合、直径20m程度の円墳が想定できる。

墳丘状の高まり

ただし、標高55m付近の平坦面の形成が、それ以上の高さを墳丘として削り出すことを目的になされたものかどうかを確定することは難しい。というのは、斜面の北西側から北東側において、同様の平坦面が標高53m付近および51.25m付近に形成されているからである。北側の一部であるが、標高49.25m付近にも平坦面が存在している。この状況を重視すれば、北側の丘陵斜面を階段状に成形するという地形改変が、ある段階で行われている可能性が高いと判断でき、上述した標高55m付近の平坦面もそれと一連のものであるとする余地が十分にある。熊本県地域では、戦前に農地獲得のため丘陵部や山間部に至るまで畑地の開発がなされたということであるから⁽¹⁾、当地の階段状の地形も同様の農地開発によるものとも考えられる。

地形の改変

また、墳丘状の高まりの東側および南側は大きく削平され、高さ3m以上の崖面となっている。その崖の下部には、かなり広い平坦面が造り出されているため、旧地形はまったく残存していない。この平坦面は、上述の階段状の平坦面とは形状が異なるため、別の目的による地形改変によって形成された可能性が高い。竹藪開墾にともなう土入れ作業などが原因の1つとして考えられよう。現在の竹藪に至るまでの土地利用の変遷について、今後調査する必要がある。なお、標高47m以下の部分（第6図の上部）は、現在の水田面に続く急な崖面となっている。

墳丘状の高まりの北側、標高56～57mの地点に倒木が存在し、その根には掘り起こされた土塊が残存していた。古墳であるとするならば、この部分は墳丘に相当することから、土塊を精査することによって土層の堆積状況を調査した（図版2-1）。その結果、竹の枝根が密に走る表土の直下に、径6～7cmの少し角の取れた礫を多量に含む砂質土が存在することを確認した。掘り起こされた土塊部分にかんする限り、この砂質土をさらに分層することはできず、また多量の礫が包含される状況などを根拠とすれば、これは地山である可能性が高い。したがって、古墳と判断するために必要な盛土の存在はまったく確認できなかった。この高まりが古墳であ

土層観察

表土と地山



第6図 高熊2号墳墳丘測量図

るとすれば、それは地山を削り出すことによって築造されたものと推測せざるを得ない。

なお、表土と地山の境界付近（図版2-1の土塊中にみられる分層線が地表面と接する付近）で、土器片1点（第9図）を検出した。当地点の表土堆積以前に、何らかの人間活動が存在した可能性を示すものとして重要である。

土器の検出

さて、以上の状況を総合して判断すれば、当地点が古墳であるとする確証に欠けるといわざるを得ない。出土した土器片も、古墳の存在を確実に示すものではない。また、頂部平坦面の窪みなどの、伝マロ塚古墳出土とされる遺物が当地点から発掘された可能性を示す痕跡も、今回の調査では見出すことができなかった。

古墳と未確定

ただし、数度にわたる地形改変がなされているにもかかわらず、当地点が円丘状に残されている点は重要である。これを評価すれば、地形が改変される以前に、当地点には円丘状の高まりが存在していた可能性を想定できる。

いずれにしても、当地点の歴史的 성격の詳細については、今後の発掘調査などによって明らかにしていく必要があるだろう。（檀・杉井）

継続調査の必要性

2. 遺物（第7～9図）

2001年3月19日の現地視察時に採集した須恵器片1点、および今回の調査中に出土した土器片1点の計2点について報告する。

第7・8図は須恵器坏身の破片である。墳丘状の高まりから北西側に下った標高47m付近の平坦地で採集した。受部付近のみが残る小破片であり、立ち上がりはほとんど残存していない。小破片であるため正確性に欠けるが、直径の復元を試みたところ、受部復元径は13.6cmとなった。立ち上がりがきわめて薄いことが特徴である。内外面ともにていねいな回転ナデが施されている。色調は外面が暗青灰色（Hue 5 G 4/1）、内面も暗青灰色（Hue 5 B 4/1）である⁽²⁾。器形の特徴および復元される直径から、古墳時代後期のものと思われる。

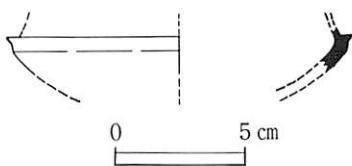
須恵器

第9図は土器の胴部片である。頂部北側に倒木が存在したが、その根とともに掘り起こされた土塊（図版2-1）の精査中に、表土と地山の境界付近から出土した。小破片のため全体の形状は不明であるが、甕の破片である可能性がある。器壁面の残存状態が悪いが、外面には縦方向のハケのあとにナデが施されていることを確認できる。内面の調整は不明である。器厚は残存部で4mm程度である。胎土には角閃石、石英が多量に含まれる。酸化焰焼成されており、軟質である。色調は外面が黄橙色（Hue 7.5 YR 7/8）、内面が明黄褐色（Hue 10 YR 7/6）である。弥生時代後期の甕の特徴である外面のタタキ目がみられないことを重視すれば、土師器である可能性があるが、詳細な時期については判断できない。（檀）

土器

註（1）玉名市教育委員会社会教育課竹田宏司氏の御教示による。

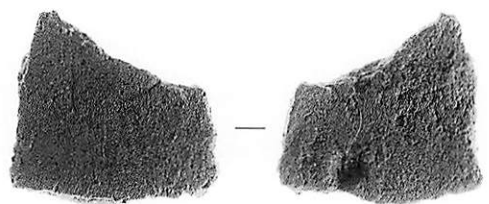
（2）土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社、1986年による。



第7図 採集須恵器実測図



第8図 採集須恵器



第9図 土器（左：外面、右：内面）

四 まとめ

測量調査の
成果

今回の測量調査では、高熊2号墳とされている墳丘状の高まりが古墳であるとする確証を得ることはできなかった。頂部平坦面の倒木によって掘り起こされた箇所土層観察でも、盛土の存在を認めることはできず、多くの礫を含む地山とその上に堆積する表土を確認するにとどまった。しかし、この土層観察時に、地山と表土の境界付近から土器片が出土したことは重要である。また、墳丘状の高まりを北西側に下った場所で古墳時代後期の須恵器片が採集されている点にも注目できる。これらの遺物の存在は、当地点において、古墳時代に何らかの人間活動が行われた可能性を強く示唆する。ただし、それらが古墳にともなうものであるのかどうかを判断することは、現状では困難である。

伝マロ塚古
墳出土遺物
調査の結果

国立歴史民俗博物館には、伝マロ塚古墳出土遺物として、肩庇付冑、衝角付冑、横矧板鋌留短甲、頸甲、肩甲のほか、鉄刀や鉄剣、鉄銚、鉄鏃などが所蔵されている。これら遺物のうち甲冑については幾度か写真などで紹介されているが⁽¹⁾、すべての遺物が正式に報告されたことはない。これまでの一般的な認識では、高熊2号墳がそれらの出土地であるとされてきた⁽²⁾ことから、測量調査とともに、伝マロ塚古墳出土遺物の調査も開始した。遺物は感動を覚えるほど残存状態がよく、古墳時代の武器・武具の構造研究にとって欠くことのできないものであると認識した。今回は現状を把握したのみであるから遺物の詳細について述べることはできないが、今後の整理作業によってそれを明らかにしていきたいと考えている。

高熊2号墳
とマロ塚古
墳

問題は、高熊2号墳から出土したとすることの当否である。伝マロ塚古墳出土遺物のきわめて良好な残存状態から判断すれば、それらが土中に埋没していたと考えることは困難である。石室や石棺など、直接土に触れることのない空間に納められていたとみなす方が妥当であろう。今回の測量調査では、これら遺物の発掘痕跡と思われるような地面の窪みは確認されておらず、また石材の露出も認められていない。そのため、当地がこれら遺物を出土した古墳であるのかどうかについても明確なことはいえず、その検討は今後の課題として残されている。

今後の調査
計画と目標

熊本県地域の前方後円墳は、熊本市域をはさんでその南北両側に偏って分布する⁽³⁾。北側分布圏の中心の1つが菊池川中流域であるが、植木町周辺地域はそのなかでもっとも南に位置しているため、熊本県地域の南北をつなぐ重要な地点であるといえる。今後、高熊2号墳やそれに隣接する高熊古墳（前方後円墳）をはじめとして、植木町周辺地域に所在する古墳の継続的な調査を実施していきたいと考えているが、それとともに伝マロ塚古墳出土遺物の正式報告書作成に向けた作業に着手することも予定している。それらを通じて、当該地域の古墳動向のみならず、熊本県地域が古墳時代において果たした歴史的役割の解明を目指したい。（杉井）

註(1) 熊本県立美術館「第十回熊本的美術展 肥後の古代の美」1985年、p.100。

野上式助編「論集武具」学生社、1991年、図版10・27。

京都国立博物館「特別展覧会 倭国-邪馬台国と大和王権-」1993年、p.109。

(2) 隈昭志「原始・古代」『植木町史』植木町、1981年。

(3) 高木恭二・藏富士寛「肥後における古墳文化の特質-筑後八女古墳群との比較-」『八女古墳群の再検討-周辺地域で、なにがおこったか-』第1回九州前方後円墳研究会大会発表要旨・見学会資料 九州前方後円墳研究会、1998年。

杉井健「墓制と生活様式の共通圏の形成」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤B・一般2）成果報告書 大阪大学文学部、1999年。